

上級学習者のテイル形使用に みられる問題点

— 文法指導の隙間

高梨信乃

◆要旨

上級学習者のテイル形使用の問題の中には、上級の段階で指導をしても効果が上がらないものがある。これは初級から中級を経て上級に至る過程においてテイル形がどのように扱われているかを見直す必要性を示唆するものである。そのための手がかりとして、本稿では総合教科書のシラバスと本文などの内容を検討した。その結果、テイル形の派生的な用法は教科書によって扱いにばらつきがあることがわかった。さらに、文法説明以外の箇所に学習者にとって難易度の高いテイル形が現れているケースが少なくないことを指摘した。これらは教材作成者や教師が気づかない「文法指導の隙間」を示すものである。

◆キーワード

テイル形、上級学習者、文法指導、隙間、教科書

◆ABSTRACT

This paper discusses incorrect uses of the *-teiru* form by advanced learners. Some of the problems observed are not solved effectively by correction in advanced level class. This fact shows that we need to reconsider how the *-teiru* form is taught in the process from elementary to advanced level. In this paper we examine syllabus and contents of assorted integrated Japanese textbooks. It is found that 1) the textbooks vary on how they deal with the secondary usages of the *-teiru* form, 2) in the textbooks we can find a considerable number of samples of the *-teiru* form used unintentionally, which are difficult for learners to acquire. 2) indicates that teachers/textbook-writers have some 'blind spots' in teaching the *-teiru* form.

◆KEY WORDS

-teiru form, advanced learner, teaching grammar, blind spot, textbook

Problems Observed
in the Usage of the *-teiru* form
by Advanced Learners
'Blind Spots' in Teaching Grammar
SHINO TAKANASHI

1 はじめに

日本語の習得が進み、コミュニケーションや勉強にあまり困難を感じなくなった上級学習者であっても、文法に関する苦労や問題が全くないという場合は稀であろう。どんな文法項目が難しいかを上級学習者に尋ねた場合よく返ってくる答えに助詞、自他動詞、敬語などがある。一方、こうした学習者が難しいと意識している項目とは別に、あまり意識されないが実は運用に問題が生じやすいという項目もある。その一つにアスペクト表現が挙げられるだろう。中でもテイル形（ここでは「ている」「ていた」の形をまとめてテイル形と呼ぶ）は、上級学習者の文章表現などにおいて誤用・非用が意外に多くみられる。

- (1) 例文 (1) (2) (3) の日本語の方はいずれも「いま」が使われたのに対して、中国語の方は三つの異なる言葉が使われた。 (中国)
→ ○使われている
- (2) 快適と感じる距離は文化によって微妙に違います。南米の人は話がもりあがったら、体がだんだん近づいている傾向があります。 (ポーランド)
→ ○近づく

このような誤用が少なくないことは、テイル形というもともと基本的なアスペクト表現の使い方が上級学習者にとっても決して易しいものではないことを示している。

2 本稿の目的

高梨 (2013) では上級レベルの文法授業で観察された学習者の誤用例やテストの結果などから、学習者のテイル形使用の問題を検討した。本稿では、主に日本語総合教科書のシラバスと本文などの内容を手がかりに、初級から上級に至る過程においてテイル形がどのように扱われているかを見直し、「文法指導の隙間」と言うべき問題点を指摘したい。

なお、テイル形の用法については、上記の文法授業で用いた庵・清水 (2003) の以下の分類を用いる。

- (3) テイル形の用法の分類 (庵・清水2003)
 - 〈進行中〉動作・出来事が続いていることを表す。
 - ・今、雨が降っている。 ・会社を出るとき、雨が降っていた。
 - 〈結果残存〉変化の結果が続いていることを表す。
 - ・窓ガラスが割れている。 ・部屋に入ったとき、窓が開いていた。
 - 〈繰り返し〉同じ動作・出来事が繰り返される。
 - ・田中さんは毎日6時に起きている。
 - ・世界では栄養失調で多くの子どもが亡くなっている。
 - 〈経験・記録〉過去の出来事を現在と関連づけて表現する。
 - ・犯人は3日前その店で食事をしている。
 - ・憲法にも書かれているように、男女平等は基本的人権である。
 - 〈完了〉基準時よりも前に出来事が起こったことを表す。
 - ・映画館に着いたとき、映画はすでに始まっていた。
 - ・映画館に着く前に、映画は始まっているだろう。
 - 〈反事実〉「実際には～ない／なかった」という意味を表す。
 - ・あのときお金があつたら、あのカメラを買っていた。
 - ・田中さんが来ていれば、パーティは楽しくなっている。

また、庵・清水 (2003) でも触れられているように、テイル形との関わりにおいて注意すべき動詞のタイプとして思考動詞と状態動詞がある。思考動詞については、主語の人称とル形・テイル形の使い分けが関係していることなどが指導のポイントとなる。

- (4) 思考動詞とテイル形
 - ・林さんはパーティに参加すると思う。(話し手の考え)
 - ・林さんはパーティに参加したいと思っている。(「林さん」の考え)

状態動詞については、「ある」「いる」や可能動詞などは通常テイル形にならないということがまず学習者に注意させるべきポイントとなる。ただし、上級レベルでこうした動詞をテイル形にする誤用はほとんどみられない。むしろ問題になるのは、状態動詞の中でもテイル形をとるタイプのほうであろう（後述）。

3 上級学習者のテイル形の問題

ここでテイル形に限らず一般的に、上級学習者の文法上の問題に対して教授者（教材作成者・教師）が取るべき対応について考えたい。

上級学習者への文法指導で経験するのは、指導の結果、短期間で効果が上がることがらと、なかなか効果が上がらないことがらがあるということである。後者の例としては、「は」と「が」の使い分けが挙げられるだろう。

さて、教授者の対応であるが、前者については上級の段階で的確な指導をすればよいと言え、大きな問題はない。一方、後者についてはそうはいかない。学習者が上級に至るまでに通る段階、すなわち初級、中級における指導が適切で有効なものであるかどうかを問う必要があるだろう。

議論をテイル形にもどす。高梨（2013）では、上級レベルの文法授業での観察から、上級学習者のテイル形の問題にはいくつかのタイプがあることを指摘した。すなわち、1) ピンポイント的な指導で効果があがること（例：思考動詞とテイル形）、2) ピンポイント的な指導が難しいこと（例：いつ〈進行中〉として表現し、いつしないのか）^[註1]、3) 指導してもすぐには定着しにくいこと（例：〈完了〉のテイル形）、4) 指導があまり行われていないと思われること（例：テキストレベルでの機能）^[註2]の四つである。

1) は上級レベルになってから教えても十分効果が上がることがらである。一方、2) 3) 4) は上級レベルで教えても効果が上がらない、もしくは、どのレベルでもあまり教えられていないと思われることがらである。こうしたことがらについては、初級から上級までの長期的な展望のもとに教え方を見直す必要があるだろう。

以上のような問題意識に基づき、4では日本語教育において従来テイル形がどのように扱われているかを確認することにする。

4 テイル形はどう扱われているか

4.1 「意識的に」提出されるテイル形

テイル形がどう扱われているかを探る手がかりとして、初級から中級まで一貫したシラバスで作成されたものと考えられる総合教科書のシリーズ『みんなの日本語』（以下『みんな』）、『新文化初級／文化中級日本語』（以下『文化』）および東京外国語大学の『初級／中級 日本語』（以下『東外大』）を概観したい。それぞれの教科書においてテイル形の各用法がどの段階で提出されているかを表1に示した。

表1 テイル形の各用法の提出課

	『みんな』	『文化』	『東外大』
〈進行中〉	初級 I 14課 ◎	初級 I 10課 ◎	初級上 11課 ◎
〈結果残存〉	初級 I 15課 ◎	初級 I 11課 ◎	初級上 12課 ◎
〈繰り返し〉	初級 I 15課 ◎	初級 I 11課 ◎	初級上 15課 ◎
〈経験・記録〉	中級 I 11課 ◎	(中級 II 4課)	—
〈完了〉	(中級 II 16課)	初級 II 35課 ◎	(中級 7課)
〈反事実〉	中級 I 9課 ◎	中級 I 1課 ◎	—

◎：文法項目として提出、無印：例文、会話文、読解文、問題など

表1のように、テイル形の各用法は、初級から中級前半までにおおむね提出されている。しかし、用法によって、取り上げ方の軽重には違いが見られる。テイル形の中心的な用法とされる〈進行中〉と〈結果残存〉は、いずれの教科書でも初級の前半に文法項目として提出されているのが確認できる。

一方、派生的と言われる用法の扱いはどうであろうか。まず、〈繰り返し〉は、三つの教科書のいずれも文法項目として扱っている。

次に、〈完了〉のテイル形はどうかというと、『文化』では初級段階で文法項目として扱われている。

- (5) 講演会はもう始まっていますか。 (『文化』初級II 35課)
 (6) 会場に着いたとき、コンサートはもう終わっていたんです。 (同上)

一方、『みんな』では初級では現れず、中級後半になって「～たところ」が提出される際に後件の述語として出ているが、この場合のテイル形の用法に注目させるような文法説明はなされていない。

- (7) 不審に思って振込口座を調べたところ、既に口座は閉じられていた。
 (『みんな』中級II 16課)

『東外大』でも同様に文法項目としての扱いはなく、中級の読解文に現れているのみである(42で取り上げる「無意識的な」提示に該当する)。

〈経験・記録〉については、文法項目として取り上げているのは『みんな』のみである。『文化』では読解文に現れているに留まり、『東外大』ではどの箇所にも出ていないようである。〈反事実〉は、『みんな』と『文化』は中級で文法項目として提出しているが、『東外大』ではどの箇所にも見つからなかった。

以上のように、テイル形の派生的な用法については、教科書によって扱いが異なっている。特に、従来学習者にとって習得が難しいとされている(張2001, 庵2001)〈完了〉のテイル形が、教科書によっては重視されておらず、十分に指導されていない可能性があるのは、問題だと思われる。

4.2 「無意識的に」提示される難易度の高いテイル形 ——『みんなの日本語』を例に

さらに注目したいのは、文法説明以外の箇所に学習者にとって難しいと思われるテイル形が少なからず見られることである。これはいずれの教科書にも共通する事実であるが、ここでは『みんな』を例に挙げる。表2をみられたい。

表2の網掛けセル内のテイル形は、文法項目としてでも、ほかの文法項目に付随する形でもなく、例文、会話文、読解文、問題などに現れている、いわば「無意識に」提示されたものである。これらのテイル形は、理解にはさほど問題がないとしても、産出は困難ではないだろうか。

以上のような予想から、高梨(2013)では、これらのテイル形を上級学習者がどの程度産出できているかを調べることを目的として、例文の動詞部分のブランクを埋めてもらう調査を行い、母語話者の回答と比較した^[註3]。結果をまとめたものが表3である。

表3の網掛けの箇所が原文の形式である。全体的に上級学習者(NNS)と母語話者(NS)の回答にはかなり異なりが認められる。例文のうち1, 2, 5, 6, 7, 9, 13は、母語話者の回答も分散しており、提示された文脈だけでは答えが一つに決まらない場合だと考えられる。一方、例文3, 4, 8, 10, 11, 12, 14, 15, 16は、母語話者の9割以上が原文の形式を選択しており、ほぼ迷わず正解が選べる場合と考えられるが、上級学習者の回答はかなり異なっている。これらのテイル形は、上級学習者が十分習得できていない、少なくとも正確な産出はできていないと言えるだろう。

5 個別的検討——「文法指導の隙間」の例

以下、母語話者の9割以上が正解を選んだテイル形(肯定)の例文について、用法ごとに検討していきたい。

5.1 〈進行中〉にあたるもの

例文10 50メートルほど先にバス停があります。そこで待っていてください。

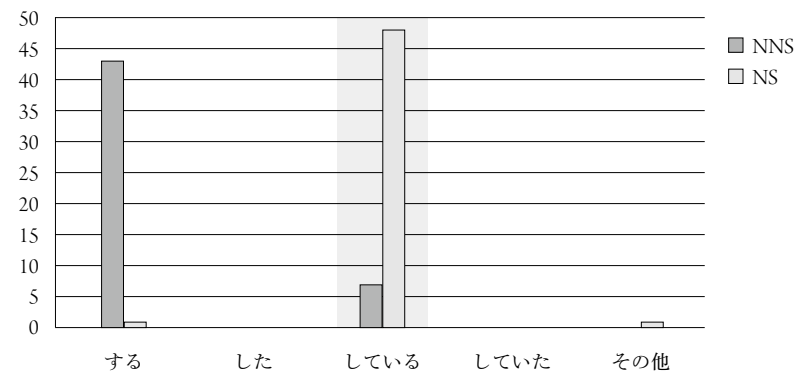


表2 『みんな』におけるテイル形（高梨 2013：表 1 を改訂）

	課	扱い	用法（初出）	文法項目
初級 I	14	◎	ミラーさんは今電話をかけています。	進行中
	15	◎	ミラーさんはIMCで働いています。スーパーでフィルムを売っています。	繰り返し 習慣
	15	◎	わたしは結婚しています。／わたしはカメラを持っています。	結果残存
	20	会話	じゃ、また電話するよ。……ありがとう。待ってるよ。	
	21	例文	ミラーさんはこのニュースを知っているでしょうか。……いいえ、たぶん知らないと思います。ミラーさんは出張していましたから。	
初級 II	22	○	あの眼鏡をかけている人は山田さんです。	～ている【名詞】
	28	◎	休みの日はテニスをしています。／子どもの時、毎晩8時に寝ていました。	
	29	◎	窓が閉まっています。	
	31	◎	レポートはまだ出していません。	
	31	○	インターネットを始めようと思っています。	思考動詞
	32	練習	タワボンさんは合格するでしょうか。……よく勉強していましたから、きっと合格するでしょう。	
	33	○	ミラーさんは来週大阪へ出張すると言っていました。	～と言っている（伝聞）
	36	○	毎日日記を書くようにしています。	～（よ）うにしている
	37	○	日本の車はいろいろな国へ輸出されています。	受身+ている
	38	問題	二人は、顔は似ていますが、性格はずいぶん違います。	テイル形状 態動詞
	38	例文	木村さんに赤ちゃんが生まれたのを知っていますか。……いいえ、知りませんでした。	
	39	会話	連絡がないので、みんな心配していたんですよ。	
	46	○	今部屋を片付けているところです。	～ているところだ
	50	問題	またお会いできる日を楽しみにしております。	
	中級 I	1	読解	昔、豊は今のよう部屋全体に敷くものではありませんでした。
2		○	お客さんが来たときだけ畳を敷いていました。	
2		○	家へ帰ったら、母から荷物が届いていた。	～たら～ていた（発見）
2		例文	子どものころから鳥みたいに空を飛びたいと思っていた。	
3		○	私は毎晩寝る前に日記を書くことにしています。	～ことにしている
3		○	来年3月に帰国することになっています。	～ことになっている
3		会話	今日1時にそちらに伺うことになっていたんですが……	
3		例文	今まで車で通勤していましたが、来月から電車で通うことにしました。	
4		○	息子は新しい電子辞書を欲しがっています。	3人称の感情+ている
5		例文	小川さんにしばらくお会いしていないんですよ。	
5		会話	道が2つに分かれている。	
5		問題	バス乗り場がありますから、そこで待っていてください。	
5		問題	東京からの飛行機は到着が遅れています。	
6		例文	どうして遅くなったの？ 今日早く帰ってくると言っていたのに。	
6		○	すみません。自分では努力しているつもりなんですが。	～ているつもりだ
6	○	そんなに甘いものばかり食べていたら、歯が悪くなりますよ。	～ていたら	

7	○	すみません。ちょっと見ているだけです。		～ているだけだ
7	読解	ある日、男たちが集まって、おしゃべりしていた。		
8	○	子どもが眠っている間、わたしはビデオを見ていた。		～ている間～ている
8	○	母が出かけている間に、パーティの準備をした。		～ている間に～する
8	○	中学校を卒業するまで、水泳を習っていました。		～まで～ている
8	○	肩からいまでの長い髪をしています。	用法的 状態動詞	～N（形／色 etc）をして いる
8	読解	……という点はほとんどの調査に共通している。	ル形・テイル 形状動詞	
8	読解	二人とも科学者の素晴らしさを褒めている。	経験・記録	
9	練習	日本は物価が高いと聞いていましたが、思っていたほどではありませんでした。		
9	◎	スタートを失敗しなかったら、金メダルを取っていたんですよ。	反事実	
10	会話	え、本当ですか。てっきりワットさんの自転車だと思ってました。		
10	読解	日本では交通事故で毎年1万人ぐらい死んでいる。		
11	◎	モーツァルトは35歳で亡くなるまでに600以上の曲を作っている。	経験・記録	
	◎	仕事が忙しくて、長い間ふるさとに帰っていない。		
11	読解	「……」と歴史の本に書かれている。		
12	読解	アナウンスには乗客の安全性に配慮する意味も含まれています。		
中級 II	13	読解	物産館を目指して歩いていたら、看板が目に入った。	
	13	○	大阪に住んでいながら、まだお好み焼きを食べたことがないんです。	～ていながら
	14	○	10年にわたり観察しているうちに、パンダの特徴がよくわかってきた。	～ているうちに
	16	○	MNK社は、データ流出は外部からの情報引き出しによって起きたものとしている。	～としている
	16	読解	不審に思って振込口座を調べたところ、既に口座は閉じられていた。	完了
	16	問題	女性落語家がフリーメールのパスワードを盗まれていたことがわかった。	
	17	読解	九月は夜が長く月が美しいことから「長月」と名づけられていた。	
	20	会話	今日はありがとうございました。ますますのご活躍を期待しております。	
	22	問題	同僚たちは次の日にはいつもの仕事ぶりに戻ってしまっていた。	
	22	問題	しかし、主人公の作った公園では、子供たちの遊ぶ声が響いていた。	
	23	読解	大切なことをコモンズの悲劇は意味している。	
	23	読解	人間は1万年間いろいろな失敗をし、教訓を得てきている。	

凡例	
◎	文法項目として学習
○	文法項目に付随して学習
	例文、会話文、読解文、問題など

表3 調査（文完成）の結果 ※『みんな』の例文より一部改変（高梨2013：表3を改訂）

	原文の表現	課	NNS 50名					NS 50名				
			する	した	している	していた	その他	する	した	している	していた	その他
1	田中さんはこのニュースを知っているでしょうか。 ……いいえ、知らないと思います。田中さんは出張から。	初級 21	0	7	28	2	13	0	1	15	13	21
2	リンさんは試験に合格するでしょうか。 ……よく勉強から、大丈夫でしょう。	初級 32	1	23	12	4	4	0	9	16	24	1
3	小川さんが結婚したのを知っていますか。 ……え、そうなんです。ちょっとも知	初級 38	12	38	0	0	0	0	50	0	0	0
4	来週のパーティ、必ず来てくださいね。 ……ええ、楽しみにし	初級 50	2	0	47	0	1	0	0	50	0	0
5	昔、置は今のように部屋全体に歌くものではなかった。客が来たときだけ量を歌	中級 1	13	13	4	11	9	0	2	0	34	14
6	私は子どもたちから鳥のように空を飛びたいと思	2	0	8	19	20	3	0	0	17	30	3
7	今日1時にそちらに伺うことにな ……ええ、私も最近全然会	3	10	15	6	11	8	0	6	12	31	1
8	山田さんに会いたいなあ。彼は元気ですか。 ……実は、私も最近全然会	5	6	19	17	3	5	2	0	45	2	1
9	バス停で会いましょう。この道をまっすぐ行くと道が2つに分 ……から右方向へ行ってください。50メートルほど先にバス停があり	5	8	0	12	0	30	6	0	44	0	0
10	そこで待	5	43	0	7	0	0	1	0	48	0	1
11	ただいま。 ……おかげさ。ずいぶん遅かったね。今日は早く帰ると言	6	0	33	0	13	4	0	2	0	47	1
12	筆者は第3章で1985年の大地震について述	8	6	11	23	2	8	0	1	47	1	1
13	日本の物価はとて高くと聞	9	0	33	0	12	5	0	14	0	35	1
14	田中：この本は私のじゃなくて、ワットさんのです。 ……え、本当ですか。てっきり田中さんの本だと思	10	2	23	2	22	1	0	2	0	48	0
15	近年日本では交通事故で年1万人ぐらいの人が亡	10	9	24	8	0	9	1	2	47	0	0
16	牛乳にはいろいろな栄養が含	12	4	0	27	0	19	0	0	50	0	0

グラフ中のNNSは上級学習者、NSは母語話者がそれぞれその形式を選択した比率を表す。背景に影がついているのが原文で用いられた形式である。

例文10は、母語話者と学習者の回答の違いが特に顕著に出たものである。日本語では待ち合わせをするとき、「～で待っていてください」「～で待っています」のようにテイル形を使うのが普通である。未来において互いと会った時点で「待つ」動作が進行中であることを示すものと思われるが、学習者が母語話者と同じ発想をせず、「待ってください」を選ぶのは無理もないことだろう。

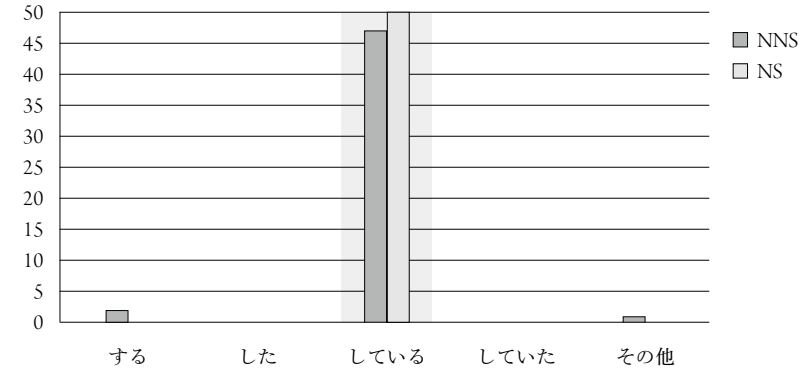
待ち合わせとは言えないが、次のようなテイル形も同じタイプと考えられる。

- (8) 晩ご飯ができるまで、ここでテレビでも見て。
- (9) 私は事務室で仕事をしていますので、何かあったら、電話で呼んでください。

谷口(1997)は、これらのようなテイル形の用い方を取り上げ、「未来のある時点で話し手と聞き手(またはその他の人物)が再会したり接触したりすることを暗示する場合」としている。これは妥当で有益な指摘だと思われるが、教育現場にはあまり浸透しておらず、教授者が意識して指導することはほとんどないのではないかと。

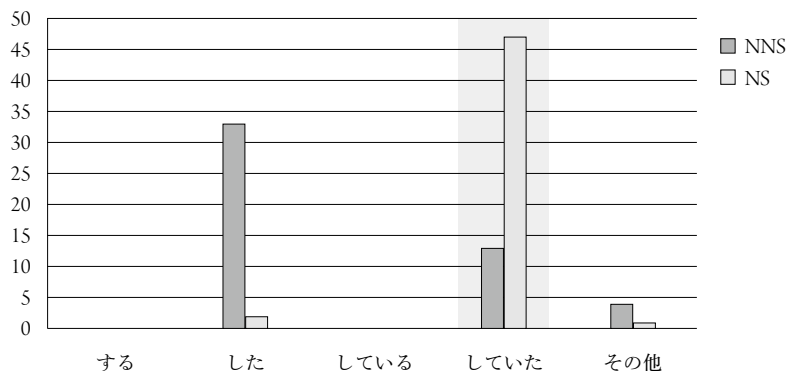
一方、対照的なのが次の例文である。

例文4 パーティ、必ず来てくださいね。……ええ、楽しみにしています。



テイル形の用い方としては同じタイプだと思われるが、この例文では学習者の9割以上がテイル形を選択している。社交表現としての使用頻度が高いことから、ひとまとまりに記憶する学習者が多いためであろうか。

例文 11 おかえり。ずいぶん遅かったね。今日は早く帰ると言っていたのに。



例文 11 の正答率も 2 割強にとどまっております、学習者にとって難しい例だと言える。引用の「と言っていた」自体は初級段階で文法項目として提出されることが多く、『みんな』では 33 課で提出されている。ただし、それ以前の 21 課で提出済みの「と言った」との使い分けをどのように説明するかが問題である。

(10) ～と이었습니다 is used when quoting a third person's words, while ～とっていました is used when conveying a third person's message.

田中さんは「あした休みます」と言っていました。

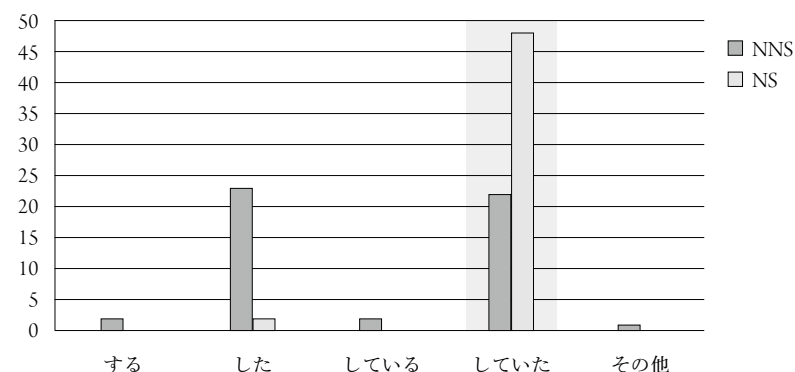
田中さんはあした休むと言っていました。(初級Ⅱ 33 課 文法説明)

(10) は、第三者の発言を単に引用する場合は「と言った」、第三者の発言内容を伝達する場合は「と言っていた」を用いるという説明である。初級のこの

段階の学習者に両形式の違いを示すためにはまず妥当な説明の仕方だと言えるのではないかと。が、現実の運用における使い分けの記述としては十分ではない。「と言った」「と言っていた」の主体は第三者に限らない(実際、例文 11 の主体は聞き手である)。また、単なる引用と発言内容の伝達という区別も必ずしも明確とは言えないだろう。しかし、中級以降、説明が補足されることはなく、使い分けの問題が取り上げられることも少ないのが現状ではないだろうか^[RE.4]。

例文 14 この本は私のじゃなくて、ワットさんのです。

……えっ、本当ですか。てっきり田中さんの本だと思っていました。



前述のように思考動詞の振る舞いには注意が必要である。例文 14 では引用内容「田中さんの本だ」は対話の直前まで持続した話し手の考えであり、結果的にそれが話し手の誤解であったことが表されている。指導を受けることがなければ、学習者がここでテイル形を発想することは困難であろう。正答率が 5 割以下なのは無理もないと考える。

しかも、「と思っていた」は常に話し手の誤解を表すのではなく、引用内容が話し手の正しい予測であったことを表す場合もある(宮崎 2002)^[RE.5]。

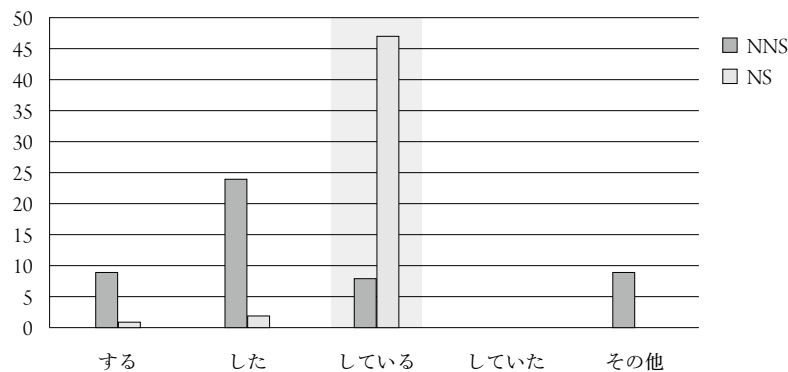
(11) 「ずいぶんあっさりしているんだな」

「いつかはこうなると思っていましたから」 (宮崎2002: 167)

共起する要素や文脈によって全く異なる意味になりうることを考えると、学習者にとっては、産出はもちろん、正確に理解することも易しくはない用法だろう。「と考えていた」「と信じていた」なども同様である。

5.2 〈繰り返し〉にあたるもの

例文15 近年日本では交通事故で年1万人ぐらいの人が亡くなっている。



例文15のテイル形は、「1万人ぐらいの人が亡くなる」という出来事が毎年続いて起こっていることを表す、〈繰り返し〉の用法だと考えられる。〈繰り返し〉自体は、初級の早い段階で提出されているにもかかわらず、例文15の正答率は非常に低く、2割に満たない。学習者にとっての難しさの一つは、この例文が複数主体であることだと思われる。〈繰り返し〉のテイル形が提出される際に示されるのは、(12)(13)のような個人の習慣など、同一主体の動作の〈繰り返し〉であるが、例文15はそれとは異なる。

(12) ミラーさんはIMCで働いています。 (初級I 15課)

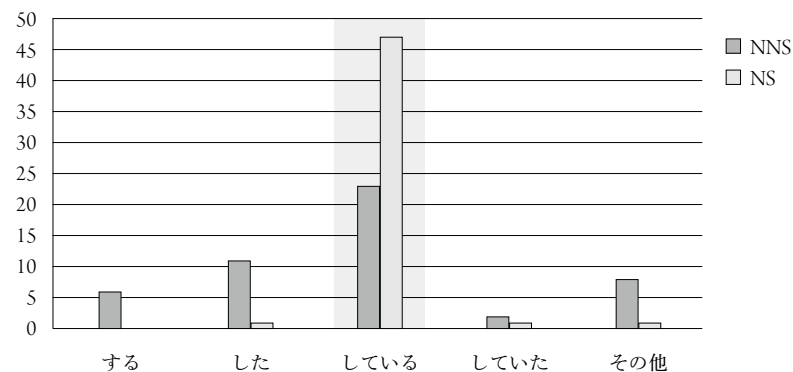
(13) 休みの日はテニスをしています。 (初級II 28課)

例文15で母語話者がテイル形を選ぶのは「年1万人ぐらい」という割合を表す表現の存在によるものである。すなわち、この表現を手がかりに複数年の期間の中で事態を捉え、そこから〈繰り返し〉の意味を読み取るからであろう。学習者にとって同様のプロセスをたどるのはかなり難しいことだと考えられる。以下も同様の問題で起こった誤用であろう。

(14) 年30万頭のペットは安楽死させられた。 (中国)

5.3 〈経験・記録〉にあたるもの

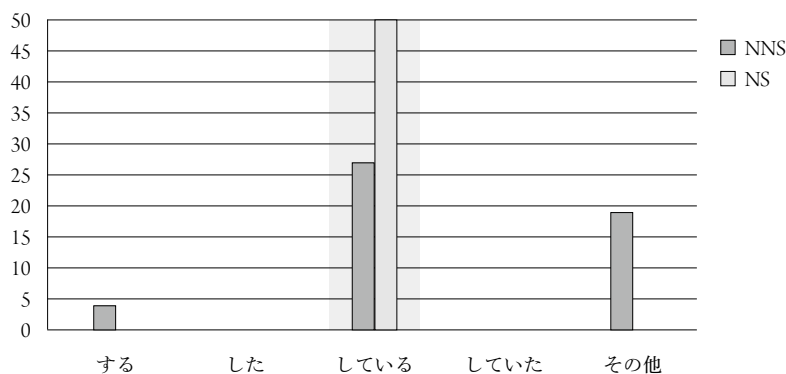
例文12 筆者は第3章で1585年の大地震について述べている。



このような〈経験・記録〉のテイル形は、文章中の引用などで頻繁に使用され、学習者もよく目にするはずであるが、正答率は5割に満たない。冒頭で見た(1)も同様の誤用である。アカデミック・ライティングなどで特に重要な表現なので、注意を向けさせる必要がある^[注6]。

5.4 状態動詞にあたるもの

例文16 牛乳にはいろいろな栄養が含まれている。



状態動詞「含む」の受身形であり、この場合「含まれる」「含まれている」の両方が可能であるが、母語話者は全員がテイル形を選択している。学習者の回答は「含まれている」と「含まれる」を合わせて6割強であり、残りは自他の選択などで誤りを犯していた（「含んでいる」「含めている」など）。

状態動詞には、「いる」「ある」「できる」などのル形専用のほか、ル形・テイル形両用（「異なる／異なっている」「位置する／位置している」）とテイル形専用（「似ている」「とがっている」）があり、動詞ごとに正しい形を覚えなければ、(15) のような誤用の原因となる。

(15) ペットの飼育状況は現代社会の姿を反映するのではないだろうか。

(中国)

状態動詞に関してはこのような語彙に関する情報が重要であるが、教授者もそのことを認識する必要があるだろう。

6 おわりに

以上、教科書の中に「無意識的に」提出されているテイル形の例をみてきた。一般に、教科書の会話文や例文などに未習の文法項目や用法が現れるのはさほど珍しいことではない。自然な日本語を示すことを優先すれば、ある程度やむを得ないと思われる。しかし、教授者（教材作成者・教師）は、少なくともそれが未習であることを知っている必要があるだろう。5でみたテイル形は、用法として未習であったり難易度が高かったりするにもかかわらず、おそらく意識されていないということが問題である。教材作成者は気づかずに使用し、教師もやはり気づかず、授業で素通りしている可能性が高い。それを本稿では「文法指導の隙間」と捉えた。

テイル形は初級の早い段階で基本的な用法が提示されるが、学習者にとってさまざまな用法を理解し、個々の文脈に応じた適切な産出ができるようになるのは容易ではない。しかし、その難しさが教授者には特に見えにくいということが、テイル形について言えるのではないか。学習者の困難点を洗い出し、教授者が認識することが、指導を改善する第一歩であろう。

「文法は初級で終わりではない」という認識は現在では広く共有されていると思われる。本稿は、初級から中級、上級という長期的な展望の中で文法をどのように教えるべきかを考える取り組みの一つである。

〈神戸大学〉

注

[注1] ……たとえば、本稿例文(2)はその必要がないのに〈進行中〉として表現したことによる誤用と考えられる。

[注2] ……工藤(1995:111)

[注3] ……調査協力者：NNS50名 上級レベル以上の学部生・大学院生（中国22名、

韓国7名、台湾3名、ベトナム3名、オーストラリア2名、その他ルーマニア、フランスなど欧米圏12カ国)、NSS0名(学部生・大学院生)。

[注4] …… 「言った」と「言っていた」の使い分けを検討した研究に藤城(1996)や江田(2013)がある。藤城(1996)は、シテイタの派生的機能として「出来事を感じたときの観察者の視点を浮かび上がらせる機能」があるとし、その機能ゆえに人の発言の内容を伝える際には「言っていた」が選ばれるのだと説明している。また、江田(2013)は、会話資料の調査から、「言った」の主体は約70%が一人称、二人称であるのに対し、「言っていた」の主体は約90%が三人称であったという結果を示している。さらに、発話者や情報の内容がどの程度はっきりしているかという点に両形式の違いがあるという見解を示している。

[注5] …… 宮崎(2002)は、話し手の誤解を意味するのは、例文14のように副詞「てっきり」と共起した場合のほか、「～まで」などの期限を表す要素が共起した場合や、形式名詞「もの」や取り立て助詞「ばかり」と組み合わせられた場合であると指摘している。

[注6] …… 先行研究を引用する場合の文末表現については清水(2010)に詳しい考察がある。

参考文献

- 庵功雄(2001)「テイル形、テイタ形の意味の捉え方に関する一試案」『一橋大学留学生センター紀要』4, pp.75-94. 一橋大学留学生センター
- 庵功雄・清水佳子(2003)『日本語文法演習 時間を表す表現—テンス・アスペクト—』スリーエーネットワーク
- 許夏珮(2005)『日本語学習者によるアスペクトの習得』くろしお出版
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』つじ書房
- 江田すみれ(2013)『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクト—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法—』くろしお出版
- 清水まさ子(2010)「先行研究を引用する際の引用文の文末表現—テンス・アスペクト的な観点からの一考察」『日本語教育』147, pp.52-66. 日本語教育学会
- 高梨信乃(2013)「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題—動詞のテイル形を例に—」『神戸大学留学生センター紀要』19, pp.23-41. 神戸大学留学生センター
- 谷口秀治(1997)「テイル形に関するムード的側面の考察」『日本語教育』106, pp.143-152. 日本語教育学会
- 張麟声(2001)『日本語教育のための誤用分析』スリーエーネットワーク
- 藤城浩子(1996)「シテイタのもう一つの機能—感知の視点を表すシテイター—」『日本語教育』88, pp.1-12. 日本語教育学会
- 宮崎和人(2002)「認識のモダリティ」宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃『新日本語文法選書4 モダリティ』pp.121-171. くろしお出版